

連載

ニワトリの獣医師と呼ばれてたくて 15

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

桜は毎年春になると満開に咲き、人々の門出を祝ってくれる。咲く姿の美しさに心が穏やかになる。「さあ頑張ろう!!」という気持ちになるものだ。少年時代からの念願であったニワトリの獣医師としての第一歩をこの春から踏み出す、そんな人生の門出には満開の桜が相応しい。ところがである。東北地方(福島県)への春の訪れは遅い。四月上旬に桜は未だ咲いていない。それどこ

これがラボ??

るか雪が積もることもあるらしい。まして研究所は「智恵子抄」で知られる安達太良山の中腹にあるので、この時期に桜の話題など見当違いでむしろ肌寒いくらいだ。季節感のズレに多少の違和感を覚えたが、ひんやりと澄んだ空気に包まれた新生活のスタートも悪くない気がした。厳しい冬を耐え忍んだ後に一斉に咲く東北地方の桜を今では気に入っている。

「今日からこの場所が俺の城だ。頑張るゾ!!」

初出勤の朝、筆者はラボの前に立ち止まり、そう思った。将来、この場所が筆者にとって神聖な場所になるかもしれない、そう思うと、入社前に初めてこの場所を訪れた時のことが思い浮かんだ。

その日は辺りに雪がたつぷり降り積もっていたと思う。筆者はドクターKに案内されて夜遅くラボに到着した。辺りは真っ暗で明かりは星の光のみ。車のヘッドライトで道を照らすと、道を挟む木々の枝に雪が積もり、まるで雪のトンネルを走って

いるようだ。真っ白な雪が筆者を何か神聖な場所に導いてくれるような感覚になった。

「さあ、着いたよ」とドクターK。「ここですか」

ドクターKの視線の先には、真っ暗闇の中にひっそりと佇むペンション風の小さな建物がそこにあった。

「これがラボ??」

「こんなペンションみたいな建物がラボなのか...」

人生の新たなスタートを切る神聖な場所として、周辺の自然環境は最高だと感じた。しかし、建物はペンション風であり、筆者にはどうして

も研究所というイメージと合致しない。大学のような建築様式で規模の小さい建物をあらかじめ想像していたからだ。

母校である岐阜大学は新築移転して十五年といった、大学の中では比較的新しい建物だった。その中でもわが研究室は大変高価な設備を保有し抜群の研究環境であった。

「ペンション風の建物で実験や検査ができるのだろうか?」

これが入るとペンション風の外見とは異なり、ルーチンワークの代表格であるニワトリの抗体検査用の器材などが所狭しと並んでおり、大学の実験室を思わせる雰囲気ではあった。しかし、細部に目を向けると大学の研究室とのギャップを漠然と感じたものだ。

当時も今も変わらないが、PPQCでは業界が現在必要とする、あるいは将来必要になるであろう検査や研究が優先的に行われている。大学のようにマイペースに研究ができる環境と異なり、一企業として運営していくことが大前提なのだから、社会のニーズに応じた業務が優先されることは当たり前である。したがって

て、優先業務である検査の効率はいろいろな工夫や予備実験に基づいて究極的に高められている。この点は特筆するに値する。

しかし逆を言えば、優先順位の低い仕事に関連した設備は不足してい

獣医師の資格なんて…

ラボに勤務し始めると、大学時代までには感じなかった様々な不便を感じる場面が少なくなかった。

例えば、使用できる水量の絶対的な不足は深刻な問題であった。冬季には給水設備の凍結問題が加わった。これまで蛇口を捻れば水が大量に出る環境だったので、この種の問題に遭遇した時はかなり面食らった。当然のことながら給水設備の凍結防止といったメンテナンスも仕事の一つになる。

大部分の人は便利さに慣れると、その状態が当たり前の状態になる。物事の仕組みを全く知らずとも便利さは簡単に享受できる。しかし、このような状態を単純に喜んでばかりではよいのだろうか。当初ラボで感じた様々な不便は、結果として便利さと引き換えに思考や一般基礎知識が

る場合が多いということになる。

その時漠然と感じたギャップはいくつかの不安として脳裏を交錯したが、このラボで働くうちに筆者の考えが非常に硬直的であったと気がつくことになった。

決定的に不足していることを認識させてくれた。

それに比べ、ドクターKの知識量は学術的な知識に限らず半端でない。加えて、不便な状況下でも極めて前向きな姿勢で取り組む。幾重もの修羅場を経験し、「無」から仕事を作り上げてきた強さは、筆者には計り知れないものを感じる。

その他にも思考が硬直的だった筆者を典型的に示したエピソードがある。それはウイルスを増殖させるために細胞培養をした時のことだ。いろいろ準備していく段階になると専用の培養設備がないといったことに気がつく。入手までに時間がかかる試薬等の消耗品は注文すれば済む。しかし設備は費用のことを考えれば簡単に揃えてほしいと言えない。筆者が不便さを口にする

「不便と感じるなら、まず工夫することを考えなさい。その上でどうしても必要な設備を揃えればいい」とドクターKは筆者の不満を意に介さない。

「大金の必要な大きな設備は直ぐに揃えられないでしょ」と言い返した。

「その設備は本当に必要なのか？」

「別な方法を試みたのかい？」

「試験方法の原理はどういった理論に基づくものなのか？」

と矢継ぎ早に質問が返ってくる。

これまで考えもしなかった質問に対し、「詳しくわかりません…」とシヨンボリと答えたものだ。

こういったラボでの会話から筆者の硬直的であった思考パターンはデジタル思考に由来していたことを教わった。

つまり、この場合で言えば、実験に機械が必要↓機械がない↓実験できない、という図式だ。極端なところ、判断基準に可あるいは不可といった答えしか存在しない。これでは応用力がないと言われても仕方がない。「弘法筆を選ばず」といった格言もあるように、真の実力があれば

使う道具は関係ない。

もちろん、大学では自分なりに工夫して実験などを組み立て、応用力を働かせてきたつもりだった。しかし、それはある程度準備された土台の上でのレベルであって、その土台の基礎部分まで考える習慣が極端に少ない自分に初めて気がついた。ショック。

筆者と同世代の若者は、世間から○×世代と言われてきた。自分自身の思考も知らぬ間に同じ色に染まっていた。元来、大学は単に暗記に頼る知識ばかりでなく、物事を掘り下げる思考を学ぶべき場所のはずであった。それが生活を維持するためにお金の工面に必死になるという大義名分を逃げ道にして、一番大事な訓練が足りなかったことを、その時初めて気がつかされた訳だ。

さらにドクターKは続けた。

「世の中で一番役立つ免許は自動車の運転免許。獣医師の資格なんて役に立たないよ」

「……」

返す言葉が見当たらない。これまでニワトリの獣医師になりたいという希望を唯一の拠り所にして努力してきたこと。希望の職業に

就くことができた満足感。獣医師になれば生活が保障されるはずといった能天気な思い込み。

一瞬の間に様々なことが筆者の脳裏に浮かんで、脆弱な基盤の上に出来上がった自信が音を立てて崩れていくことを感じた。

「そんな殺生な…」という表現がびつたりとはまるかもしれない。表情が凍りついた筆者に、ドクターKはさらに続けた。

「つまり、社会にどう貢献できるかが最も重要だ」という意味さ。極論すれば資格など二次の問題だ」

昨今、企業のリストラや失業に対する個人の防衛手段として資格を取るということが一種のブームになっている。ビジネス雑誌には、中小企業診断士、社会労務士、税理士といった以前から認知された仕事から、横文字で何を仕事とするのか理解し難い資格まで様々ある。

いずれの場合でも、資格を取ることはばかりがクローズアップされることが多く、資格を獲得した後どれくらいかのメリットがあるのかは記載されていないケースが多い印象を受ける。結局のところ、資格を一手段としてどう社会に働きかけるのかと

いったビジョンがなければ、資格取得というブームに踊らされているだけとも言えるだろう。

最近のことであるが、資格(免許)に頼るだけでは社会で生きていけないという事例に遭遇した。それはある種鶏場を巡回した時のことである。そこでは、初生ヒナの雌雄鑑別師であった方が飼育管理要員として農場に再就職したという話を聞いた。ヒナの鑑別技術は世界の中で日本が誇る技術の一つであったはずだ。今でも海外に行けば活躍する道

ニワトリの産卵率

PPQCでの仕事はラボワークばかりでない。実際に生産現場に行くと、ニワトリの様子を観察することや検査サンプルの採材も重要な仕事だ。駆け出しの数カ月はドクターKに同行して勉強したものだ。

ある養鶏場にて——
「この群の産卵率はどれくらいですか？」と鶏舎内でドクターKは話を切り出した。

「八五%です」と現場責任者。
「日齢は何日齢ですか？」
「三百日齢ぐらいです」

はあるようなのだが、国内ではヒナの鑑別が羽毛鑑別が主流となりつつあるため活躍の場が少ない。つまり、国内では鑑別師として社会に貢献できなくなる。時代の流れとはいえない恐ろしいことである。

PPQCに勤務して以来、獣医師の資格は一手段として「業界のハブ」として活躍したい」ということが、新たな目標となった。今から十年前にドクターKから指摘していたできたことは非常にありがたかったと痛感している。

「軽い呼吸器症状が見られる個体がありますね。IBの影響があるかもしれないですね」

「今回のロットは前のロットに比べて悪くて不満ですよ」

「今まで抗体の推移を分析した結果では、育成後半からIBの抗体が不安定ですね。ここを安定させると全体で産卵率が二%ほど改善できるかもしれませんね」

といった類の会話がドクターKと現場責任者との間になされていた。隣で耳を傾ける筆者は、「三百日

齢で八五%。いい成績じゃない。何か問題あるのかな」と内心思ったので、帰りの車中で質問してみた。
「あの成績で何か問題あるのですでしょうか？」

「あの群に関しては特に酷いわけではないよ。後でマニュアルを確認してみればよいけど、あの鶏種で三百日齢ぐらいなら八六〜八七%が標準ラインだよ。他群の同じ日齢時には九〇%近くの産卵率をマークしているのだから、責任者としては不満かもね」

「なかなか厳しいですね」

「ところでニワトリの初卵は何日齢が知っているかね」とドクターKは話を続ける。

「ハイ。たしか育成の最終では卵を産みますから百二十日齢ですか」

「そうだね。では産卵ピークは？」

「二百日齢ぐらいがピークで、産卵率九一〜九二%でしょうか」

「今は少し早まって産卵ピークは百八十日齢ぐらいだよ。産卵率と目安となる日齢は覚えておくべきだよ。何しろ数%の差が大変な金額のロスに繋がるのだから」

採卵養鶏の生産現場ではこの一〜二%の産卵率の差が非常に大きな経

済的ロスに繋がる。わかりやすくするために非常に単純に計算すると、一〇万羽の養鶏場の場合では産卵率で二%の差は卵二〇〇〇個/日となる。卵一個を六〇グラムとすると、二〇〇〇個×六〇グラム＝一二万グラム(一二〇キログラム)である。仮にこの差が一年間続くと、一二〇キログラム×三百六十五日＝四万三八〇〇キログラムとなる。卵の価格はキロで取引される。一キログラム当たりの価格を一七五円とすると、四万三八〇〇キログラム×一七五円＝七六六万五〇〇〇円にも上る。

企業的に営んでいる採卵養鶏場では五〇万羽、一〇〇万羽あるいは二〇〇万羽といった規模も珍しくない。とすると、産卵率二%のロスは一年間に五〇万羽で約三八〇〇万円、一〇〇万羽では七六〇〇万円、二〇〇万羽では一億五〇〇〇万円にも上る。ロスを考えるだけでも恐ろしい金額となる。それだけシビアな世界であると実感できるだろう。

加えて、採卵鶏は経済動物なので生きていても産卵しなければ価値はない。産ませることが重要なテーマだ。ニワトリにとって産卵は人間で言えば御産することに当たるはず

だ。したがって、人間でもそうであるように多少の生理的なりズムの變化やストレスでも産卵しなくなることも十分にある。この辺りがこの仕事の難しいところで産業動物に携わる者にとって永遠のテーマとなる。さらにドクターKは続ける。

「産卵率にヘンデイとヘンハウスがあることを知っているかね」

「産卵率＝産卵個数/実羽数×一〇〇ではないのですか？」

「それはヘンデイ(HD)の産卵率と呼ぶものだ。この指標はニワトリのコンディションを純粹に示すのだよ。普通産卵率と言えば、この数値を指すことが多い」

「そうですか。勉強になりました」

「一方、ヘンハウスというのは鶏舎単位で産卵率を考慮することなのだ。計算式は簡単に言うと、ヘンハウス産卵率(HH)＝産卵個数/鶏舎収容羽数×一〇〇で導き出せる」

「何故このような指標が必要なのですか？」

「想像してごらん。ニワトリは日齢が経過してくると、鶏舎内に残存する羽数が少なくなるだろう。しかし、羽数が少なくなったからといって鶏舎当たりの電気代や管理人員費

などのコストは一定だから生産量に對してコスト比率が増大してくる。経営者は一鶏舎当たりの生産量に對するコストを常に把握しておく必要があるのだ」

「非常に面白いですね」

「付け加えると、これらの指標を応用することで経営に必要な数字が弾き出せる寸法だ」

筆者は養鶏場を遊び場の一つとして育ったため、いくつもの指標については漠然とイメージできていた。加えて、ドクターKからご教示いただいたことで直ぐに頭の中に入ることができた。「事象を具体的な数字で捉える」という習慣を持ち合わせていなかった筆者にとって新鮮で興味深いものであった。

「獣医師といっても病気を診るだけでなく、経済的な事情を頭に置く必要がある」ということをまさに実感した瞬間だった。

獣医師の中には資格の持つ特殊性に起因するものなのか、妙なプライドばかりが先に立ち、経済的な事情を把握せずに病気のみの話で終始してしまう場合が多いようだ。

筆者も一歩間違うと、その一人であつたかもしれない。現在、経済的

な発想をつけるには卒業後の環境が重要だ。これまでに得られた経験を前提として振り返ると、発想を学ぶ動機を教示いただけたいことが大きな財産であると感ずる。

獣医学は応用学として産業に貢献する学問であるならば、経済的な仕組みを学ぶ機会を増やすべきだと痛感する。大学は自ら学ぶ場であるといつても、キッカケを教育的に提示することが必要ではなからうか。

産官学一体の研究プロジェクトを立ち上げるといった話題が新聞紙上を賑わして久しい。また、この春から国立大学が独立行政法人化され、一般の法人と同じような土俵に立つことを余儀なくされている。

これらの試みは概念こそ立派な部分はあると思うが、分野(業界)によっては、実行はほど遠い存在であると思われる。一般社会からかけ離れた存在になりやすい大学という機関と実業である産業界の橋渡し役を、今後のPPQCにおける一つの役割としたいというのも筆者の夢の一つである。

筆者・楠ビーキーキューシー
品質管理&生産管理部門長
獣医学博士/獣医師